

概要報告

実施期日	8月2日(火)
部会名	中学校 国語部会

テーマ 『書く力を高める授業の工夫～生徒が主体的に学習する授業～』

提案概要

題材名 「立場と根拠を明確にして書こう 意見文を書く」

学年 第2学年

《研究のねらい》

「書くこと」は自己表出する一つ的手段であるとともに、考えを深めたりまとめたりするうえで重要な技能である。しかし、平成27年度の全国学力・学習状況調査において、神奈川県も「書くこと」の能力への課題が、浮き彫りになった。また、本校の生徒実態把握アンケートでも、日常生活で文章を書く機会がほとんどないこと、書き方が分からないこと、自分の思いや考えがうまく伝わらないことに生徒は困っており、書くことに苦手意識をもっていることが分かった。

このような実態を踏まえ、3年間を見通した「書くこと」の指導において、生徒の書く意欲を引き出すことや書く能力を高めることを目的とし、市の学校教育研究会中学校国語部会の助言を得ながら実践をすすめた。

《実践の概要》

「論理的な文章構成ができること」と「推敲を行う中で、より説得力のある読みやすい文章にすること」の2点に重きをおいて授業づくりを行った。本単元では「日本人の英語力を考えよう」をテーマにし、今後日本人は英語とどのように付き合っていくべきかを、次のような手順で書かせた。

- ①構想 調査書を読んで、自分の考えをまとめる。根拠となるデータを選ぶ。
- ②構成 序論と結論の整合性に注意しながら、本論に盛り込みたい事例やデータを整理する。
- ③作文 構成をもとにして文章を書き起こす。
- ④推敲 友人の意見を参考にするなどして、文章を客観的に捉え直し、よりよい文章に書き直す。
- ⑤振り返り 書き上げた文章を自己評価し、達成できたことや今後の課題を考える。

《実践の成果》

- ・文章構成に目を向けて書くようになった。
- ・読み手を意識して、作文したり推敲したりできるようになった。
- ・身に付いた力や課題を意識できるようになった。

《今後の課題》

- ・自分だけの思いになってしまい、根拠があいまいな生徒への支援。
- ・語句や文法を正しく使って文章を作ることへの指導方法。
- ・生徒がより意欲的に取り組むことができる作文のテーマ。

質疑概要

次の3点の質問が挙げられた。

Q どんな題材で600字、800字の原稿用紙を用いたのか。

A 800字の原稿用紙は3年の批評文で用いた。

今回の600字は「もっと書きたい」と思わせる字数であった。

授業時間内で書き終わらせてなるべくその場で提出させたい意向もあり、そのような字数を設定した。

Q ペア学習する際、アドバイスや注意させる観点は示したのか。

A 今回は構成(序論と結論の整合性、さらに具体例の整合性)に着目させた。また、自分の悩みを相談させてからペア学習に入るとよりアドバイスしやすくなる。

Q 一人ひとり、学級で発表させることはないのか。

A 1年はスピーチで発表させたが、今回は時間の点で厳しかった。

作文を PC に打ち込み、冊子にしたうえで読み合うこともあった。その際、よくできている作品にはシールを貼り相互評価を試みた。

話し合い活動につなげたいが、どうすればよいか思案している。

→ (それに対する意見) 国語で作文した後、総合的な学習の時間で発表するという実践もある。評価は難しいが、生徒たちは喜んで活動していた。

研究協議概要

研究協議の柱は次の2点である。

①生徒の書く意欲を引き出すための工夫。

②意見文や批評文を書かせる時の指導の工夫。

4人グループで二つの柱について45分間協議した後、1グループ3分間で協議の内容を報告する形態で行った。

①について

- ・テーマ設定の工夫をする
- ・相互評価させる
- ・評価の観点を明確に示す
- ・書くことが何のためになるのか、何の力になるのかを明確に示す
- ・継続的な指導を行う
- ・成功体験をさせる
- ・入試問題を意識させる
- ・他教科とのつながりを大切にする
- ・表現の優れた作品に触れる機会をつくる
- ・字数の設定をする
- ・目的をもたせる (作文を応募する→入賞する→意欲につながる)

②について

- ・書き終えた後、文章をどうするのかを明確に示す (掲示する、評価しあうなど)
- ・3年間を通しての指導計画を作成し、継続的に指導する
- ・双括型のワークシートを用意する
- ・筆者の工夫を生かして作文させる (段落構成、比喻表現など)
- ・ホワイトボードや付せんなどを教材に取り入れる
- ・目標を明確に示す
- ・対戦形式の意見文を書かせ、グループで交流させる
- ・継続的な文法指導を行う
- ・テーマ設定の工夫をする

まとめ概要

3年間を見通して、指導内容の重点化を図り、系統的、発展的に指導できる指導計画を作成・改善することが重要である。その際、「書くこと」を含めた言語活動が、全ての学びの基礎となることを念頭に置き、国語の授業で身に付いた力を、他教科との連携で更に定着させていくことが大切である。

また、アクティブ・ラーニングの3つの視点 (深い学び・対話的な学び・主体的な学び) から授業改善と言語活動を充実させることが必要である。